

平成23年度
第3回 羽黒地域審議会
会議録（概要）

期 日 ： 平成23年10月26日（水）

場 所 ： 羽黒庁舎3階 集会室

平成23年度 第1回 羽黒地域審議会会議録 (概要)

○日 時 平成23年10月26日(水) 13時30分～

○場 所 羽黒庁舎3階 集会室

○出席委員(順不同)

佐藤 進、林 茂生、高田 志郎、金野 信勇、島津 慈道、山田 勝実、本間 信一
天野 俊秀、小南 孝子、阿部 良一、梅津 久美

○欠席委員

大谷 眞一、山田 鉄哉、斎藤 一、齋藤 良幸、山口 平、富樫 篤、星野 博
庄司 祐子、佐藤 繁明

○市出席者

羽黒庁舎 支所長 真田 昭良、総務課長 榎本 光男、市民福祉課長 山口 弘男、
健康福祉主幹 佐藤 き江、産業課長 岩城 公志、観光商工室長 五十嵐 満、
建設環境課長 阿部 寛、分室教育課主幹 佐藤 茂巳、
総務課課長補佐 佐藤 潤到、総務課係長 佐藤 重義、
総務課主事 成沢あかね、総務課主事 佐藤 良、総務課主事 茂木 政信

本 所 地域活性化推進室係長 三浦 裕美、

○次 第

1 開 会

2 あいさつ

3 協 議

(1) 行政改革における地域庁舎の見直しについて

(2) 協議テーマ『観光地羽黒の更なるステップアップを目指して』に係る
提言書(案)について

(3) その他

4 閉 会

【会議の概要】

1 開 会 (13時30分)

2 あいさつ

<真田支所長>

皆さん、こんにちは。大変お忙しい中、本年度第3回目の地域審議会ということで開催させていただいております。

昨年の6月に皆さんから審議会の委員をお引き受けいただきまして、市の様々な施策について説明し、協議いただいたところではありますが、地域の課題につきまして、皆さんから抽出をしていただき、羽黒地域については「観光地羽黒の更なるステップアップを目指して」をテーマに設定して、これまでご協議をいただいたところでもあります。

今年度につきましては、そのテーマについて羽黒地域審議会としての提言書という形で纏めていただき、来年度以降の施策に活かしていきたいということでございます。現在、来年度の予算要求の作業を始めているところでございまして、委員の皆さんからは次回の審議会にて提言書を纏めていただければありがたいと思っております。今日は、これまで出された意見を基に、提言書としての1つの案という形でお示しをさせていただいておりますので、皆さんからは、よろしくご協議を賜りたいと思っております。

甚だ簡単ではありますが、開会に先だつての挨拶とさせていただきます。

<佐藤会長>

皆さん本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。

周りもすっかり農作業も終わりました、ゆっくりしたな、すっきりしたなという気もしますけれども、皆さんいかがでしょうか。

今月に入りまして、記念式典が2回ほどありました。1日は市政施行5周年記念式典で、もう1回は18日の町内会連合会結成50年記念式典がありました。そんな中で、家族の形態の変化や地域活動の意識の変化で、従来通りの町内活動が非常に難しくなっているのだというお話を聞きました。また、反面、町内会に求められる活動が、非常に多様になってきて、重要性を増すというような話もありました。そんなことで羽黒のほうを振り返ってみてみますと、区長会と庁舎の関係、庁舎と本庁舎、あるいは住民との関係など、そういうネットワークを強くしていくことが必要ではないかと思えます。そういった意味で、ここは審議会ですので、大いに意見を出し合って、コミュニケーションを良くして、更なる活気のある場にしていきたいと思っておりますので、ひとつよろしく願います。

3 協 議

(1) 行政改革における地域庁舎の見直しについて

資料に基づき説明 (総務課長)

(質疑応答)

<佐藤会長>

行政改革における組織の再編というのにも必要になってくることなのでしょうが、行政サービスがこれまでより低下するという心配はないのでしょうか。

<総務課長>

将来的には職員数も年次的・計画的に削減してまいりたいという想定もございますので、その中で財政的な制約等もございますが、何とか庁舎で業務が機能していくようにという目標を掲げまして、このような改革を図りながらも、行政サービスの低下を招かないようにしていきたいということでございます。

<金野 信勇委員>

当然だと思うのですが、当面の見直し事項というのは、羽黒庁舎という意味ですか。それとも、全体はこうだが、羽黒庁舎はこういう風にやりますよと。他の庁舎と関係なく、羽黒庁舎はこうするということなのですか。

<総務課長>

これは全庁舎対象ということになります。ですから、羽黒もそうですし、藤島・櫛引・朝日・温海の全部の庁舎が対象となります。

<金野 信勇委員>

例えば羽黒中学校、櫛引中学校、あるいは藤島中学校、そこに転勤になってこられた、校長とか教頭とか、そこで頑張っている先生方は、その中学校を如何にして発展させるか、校長が責任を持って頑張っています。

それは羽黒庁舎についても同じだと思うのです。羽黒の庁舎は支所長を中心として、羽黒はこうやって行きたい。そういうことを前面に出した書面にしていって良いと思います。それに対して我々が、「じゃあ、わかった。そういう風に進めるのか」と羽黒の住民が納得した上で、もっと違った行政ができるのではないかなと思います。

自分たちがこれだというものを、まず作る。そういうものを持って動いてみる。そういう意味では支所長をはじめ、そういった意気込みが見えてきたら全然違った意見が出てくるのではないかと思っておりますし、是非そうして欲しいと思います。

<本間 信一委員>

ここにブロック化という言葉が出ていますが、今3つあるわけですが、組み合わせというのは、それぞれ課によってやるのか。例えば市民福祉課についてはさっき話しにあったように、ブロック化にして藤島庁舎に置くと。そして建設環境課に関しては、羽黒庁舎に出先機関を置くと。そうお話があったわけですが、藤島と羽黒をブロックにするのか。どういう組み合わせでブロック化するのか。そういう組み合わせにしたとき、羽黒としてはどういう風になるのかと、もう少し説明いただければと思うのですが、

<総務課長>

ブロック化のやり方と言いますか、その方向性は、税務部門でも建設環境部門でも同じで、組み合わせ的には、朝日と櫛引、羽黒と藤島、あと温海については距離的制約もございしますので、温海は単独の 3 ブロックという体制になります。税務部門は今のところは藤島と羽黒ですけれども拠点は藤島のほうに置きたい。また、建設部門につきましては、同じく藤島と羽黒ですけれども、拠点は羽黒庁舎のほうに置きたいということで検討を進めているところでございます。

<本間 信一委員>

市民福祉課の課長さんとか、建設環境課の課長さんとか居るわけですが、出先となれば、居なくなるというか、課長ではなく係長とか主幹になるという、建設環境課であれば課長さんを置いて、藤島は無くするとか、そういったことも含むということですか。

<総務課長>

ブロック化の方向性の中には、検討段階ではありますけれども、拠点でない庁舎の職員数の縮小も課題として協議を進めています。

<高田 志郎委員>

関連ですが、今、集約とか移管とかなっていますけれども、最終的には総務課とか市民福祉課とか建設環境とか、課は残るのでしょうか。

<総務課長>

最終的な形までは申し上げられませんが、現時点ではブロック化はしますが課は残ると思われまして。ただ当然、ブロック化して建設部門ですと拠点のほうに職員が配置になりますので、羽黒庁舎には建設課は残るわけですが、たぶん藤島庁舎では建設課は無くなるのではないかと思いますし、税務部門については、市民福祉課には税務班と市民国保年金班もございしますので、将来的には管理職を無くしたいという方向も示されておりますが、その辺は後々の協議の中で決まるのではないかと思います。例えば、今まで市民福祉課では、税務市民と健康福祉にそれぞれ管理職が置かれていたわけですが、税務部門のほうに藤島のほうに集約されるとなれば、当然職員が減って、市民福祉課の管理職は 1 名とか、市民福祉課という課は残るわけですが、税務市民と健康福祉の双方の班については統合になるかな、というような認識はしております。

<高田 志郎委員>

産業課が班を越えた仕事をするようになるという説明だったのですけれども、どこの課もそうだと思いますけれども、特に産業課とか建設課とかというのは班を越えても大丈夫なのではないでしょうか。

<総務課長>

例えば産業課ですと、転作とか、今年の場合災害復旧とか色々な業務がございまして、当然職員数が決まっておりますので、業務が集中した場合の忙しい時期には、別の班からもお手伝いいただき、連携体制を強化していくということで協議を進めているところでございます。

<林 茂生委員>

この中身を読ませていただきまして、今、班の見直しをしているということですが、この班の形というのは、以前の課制から見ますと、試行的な面も多分にあるというような感じを受けております。特に庁舎においては、いろんな幅広い問題があるわけですし、その中で班編成を組んでいると言う形は、私は緊急ではないですが、試行段階ではないかなと思っております。大綱の中にもあるようですけれども、我々が生活している中で市民の利便性の向上についての組織の見直し、これが一番身近な問題という感じがしております。その中で健康と医療と介護と福祉、これらの一元化は当然だと思います。私たちが生活していく中で、これは毎日いろんな面で関連がある事項でありますし。それからもう1つ、ちょっと気になっているのは、保健師を段階的に健康福祉部に集約となっていますけれども、現在はそういう形になっていないのですか。現在はどのような形になっているのかそれをお聞きしたいと思います。

<市民福祉課主幹>

現在は庁舎付けの市民福祉課の保健師として4名おります。この段階的にというのは健康課付けになるということだと思います。庁舎の市民福祉課所属でなくなる、そういう形だと思います。

<林 茂生委員>

そうしますと、本庁のほうに全部集約して、地域庁舎には地域担当として派遣するという事なのですか。そうすると、役付の方とかは体系的にうまくもっていくということ感覚なわけですね。

それからもう1つ、私、教育課の関係で思ったのですが、地域づくり・コミュニティ関係事業を総務課へ移管、こういう項目がありますが、現在教育委員会は櫛引のほうにありますね。それを一部、地域づくりのほうを総務課のほうに移管していくという形になるのですか。

<教育課主幹>

今教育委員会の本所が櫛引の方にあるわけですけれども、鶴岡地域については櫛引にある本所がみているというように、現在は機能分担しております、こちらに書かせていただいているのは、羽黒の地域で行っている事業については、こういった形で移管をしたいということでございます。

<林 茂生委員>

そうしますと、教育関係につきましては直接櫛引の方で、羽黒に対応するという事でしょうか。それで業務の一部を羽黒のほうに持ってくるということでしょうか。

<教育課主幹>

今現在、詳細について固まっているわけではないのですけれども、大きな考え方としては、現在分室教育課で行っている業務につきまして、櫛引の本所のほうに業務を集約するというのが1つです。それから、こちらのほうに書いてありますように、地域庁舎の

総務課、あと別の課にいく分も想定しておりますが、そういうことが**2**つ目。そして**3**つ目としては、現在羽黒の体育館の事務室の中に社会教育担当とスポーツ担当**7**名が一緒にいるわけですが、現時点では何名かは現地の配置職員ということで残して、引き続き同じように業務をやっていくということで、従来の業務を3つに分けて変えていくといったようなことを想定しております。

<天野 俊秀委員>

個別のことは聞いても仕方がないので、総論のような形でお尋ねしたいのですが、鶴岡市が合併して**6**年になるわけですけれども、合併の仕方は1つの市になったというわけであって、アメリカのように州が沢山集まって**1**つの国という感じではなかったわけです。**1**つの市になりながら旧町村のいろんな機能をそのまま移行してきたわけですから、その辺1つの市としての機能にしていく組織、機構の見直しというのは非常に大事なことであろうと思います。ただ、私からすれば、これだけの機構改革をすれば、市民の利便性を維持しながら、ということになるのではないかなと思うのですが、ここにも書いてありますけれども、市民の利便性を「向上」にしている。今よりも良くなるという書き方をされているわけですね。これは本当なのか。ここはちょっと、後退なのか、維持なのか、向上なのか、その辺りのところ正直な感覚でいかがでしょう。どんな組織にしようとも簡素化、統一化は必要だと思うのですけれども、大切なのは利便性だと。**1**つの申請をするのに藤島まで行かなければならない、本庁まで行かなければならないでは困るのではないかなと。その一点だけちょっとお聞かせいただければと。

<佐藤会長>

そういう意味では、改革が大事なんじゃなくて住民本位だと一番に考えておりますので、その辺重要な事案だと思いますので、その辺どうでしょうか。

<支所長>

確かにこの表現には、利便性を向上すると、効率的で利便性のある市民サービスを提供すると書いてあるわけですがけれども、私どもの感覚から言うと、現在の市民サービスを、これよりは低下させない組織機構。そしてここにも書いてあるとおりの地域の特性を発揮できると、そういったことを加味することによって、それをプラス α して利便性の向上となるのかなと、私個人的には思っておりました。なおかつ、本所に集約できるものは極力集約していくというような改革になる、ということでありまして、その点をご理解を賜りたいと思います。さきほど保健師の本所集約ということでありましたけれども、人数は定かではないかもしれませんが、本所から羽黒駐在、勤務地を羽黒に置いて活動してくれる保健師が居なくなるということではなくて、そういう風な組織替えをするということでございます。それからブロック化の話もできましたけれども、藤島と羽黒一緒にして羽黒に置くということで、じゃあ藤島に建設の職員が居なくなるかということになると、例えば除雪のときの道路が一部壊れたとか、そういったときに迅速な対応が出来ないと困るわけですね。通常の維持管理とか、そういったものについては、サービスの低下にならない、

あるいは迅速な対応がおろそかにならないような対応。それから税務部門に関しても、税の相談とか納税の相談が来ても、羽黒に職員が居なかったでは相談にならないわけなので、これは何としても職員を置きながら、所管が本所とはなりますけれども、駐在として担当職員を配置してもらい、そういう対応で進めていきたいと、本所のほうと協議している最中ですので、そのようなことをご理解いただければと思います。

<山田 勝美委員>

産業課についてちょっとお尋ねしたいのですが、ここに観光、地域資源などのそれぞれの特性に配慮した重点配置となっていますが、これ具体的にはどういう風になるのか。それから、商工関係も産業課に含まれているわけですが、この点についても具体的に説明お願いしたいと思います。

<観光商工室長>

観光、地域資源など、それぞれの特性に配慮した重点配置ということですが、観光に力を入れよう、交流人口を増やそうということも市の総合計画に謳われております。羽黒地域は観光という面では非常に重要な地域であることから、観光部門については重点配置というのが考えられるのではないかと思います。それから商工関係につきましては、本所に一元化される方向にあるのではないかと考えられるところではあります。

<佐藤会長>

羽黒は観光で生きていけるといった大きな資産があるわけで、そういった意味では観光に特化したキチンとした整備をお願いしたいと思います。それと、この改革の見直しというのはどういった時期で動くのか。それともう 1 点業務があっちいたり、こっちいたりすることになっていますよね。そうしますと引継ぎとか、運用の仕方とか、その辺はきちんと動いていけるのか、今日ある集会がありまして、その中で地域コミュニティの関係はどうなっているか、責任分担というか役割はどうなっているか、どこが主管でどういった形で動いているかとか、議論が色々ありました。その中で、櫛引とか藤島のほうは、ある程度公民館活動とかコミュニティがあってやっておりますけれども、私の感じるところでは羽黒のコミュニティセンターが教育のほうに所属しているということになっているわけですが、どういう管理をされているのかとを感じるわけですが、そういった組織改革によって、引継ぎの方法とかを十分にさせていただいて、実はわかりませんとならないように十分注意していただきたいと思います。今の観光課の話ではないのですが、これからの羽黒を背負って立つような資産を大事にして皆で盛り上げていこうというところは、しっかりと大事にさせていただきたいと思いますので、その辺の引継ぎの件等についてはどのように考えているのかお聞かせいただきたいと思います。

<総務課長>

今回の行革でございますけれども、それぞれ目標年次的なものがございまして、例えば今年度中なすべき組織等の改革はこういうふうにと。先ほど保健師さんの話がございましたけれども、これは 28 年度まで対応するといったことで、それぞれ年度の目標、この

業務はこの時期まで、というように進めているところでございます。

<佐藤会長>

はっきりこうだというのは決まってないわけですか。

<総務課長>

目標の年次がございまして、それまで何とか執行していきたいということで進めているわけでございます。あと、それぞれ組織機構の見直しとか、先程ございましたけれども、当然スムーズな移行を図るうえでの、事前の協議検討ということで、来年度以降そういった移行が想定されるとすれば、今年度中に十分な協議をして支障がないようにしますし、引き継ぎにつきましては、それぞれのポストに就いていた職員たちは、新たに業務を引き継ぐ職員に対し、業務に支障のないようにきちんと文書で引き継ぐといったように、当然そういった事務手続きを踏むわけでございます。

<佐藤会長>

はい、ありがとうございました。

また、役人と言うのは2年か3年で変わっていきますので、「そういう話は引き継いでいけませんのでまた検討しますか。」なんて議論は良くあるのです。そういう形では、待った我々はどうなのだ。また最初からやり直しかと。そういうケースが間々あるように感じられますので、その辺上手くいくようにひとつよろしくをお願いします。

<金野 信勇委員>

ここにも書いてありますが、各庁舎がメリット、あるいは利便性と書いてあるわけですが、確かに見直しは必要だと思います。ただ、このようになったときの実際のデメリットや不便になること、そういうものを検討したほうがいいと思います。これはサービス業ですから、このようにしたら羽黒はこれだけのサービスになると。それをどれくらい一生懸命検討するかです。後の見直しについては、私は問題ないと思います。これによって、ここに住んでいる住民が不便に感じるが出てこないか、その辺をもう1回検討する必要があると思います。こういう不便になることに関しては、このような形で対処しなければならぬといったところまで考えていかないと、これは櫛引だよ、これは鶴岡市だよ、教育は櫛引だよと、そういう風に色んな問題が出てきたときに、どう対処するのか、その対処の仕方をもう1回検討する必要があると思います。

最初に言ったのは、そこを言ったのです。そこはそこで、羽黒は羽黒でそういう事をやりながら、そこを検討して、そして不便になることは必ず出てきますから、デメリットも出てきますので、不便なところをどのように対処するのか、そこを検討していただきたいと思います。

<支所長>

ご指摘の通り、そういったデメリットの部分が場合によっては出る可能性も確かにあると思いますが、デメリットの部分をきちんと認識をしながら、次の体制を組むための過程ということで見ていただく必要があるのではないかと考えております。ブロック化が最終

形ということには、たぶんならないというように私は思っていますし、ゆくゆくは本所集約をしながら、地域のほうに駐在をするというような形も見えてくるのではないかということもありますので、市民サービスの低下、あるいは、即応性、迅速性に欠ける対応、体制となった場合は、次の体制に組みなおすために活かしていくといったように、柔軟に対応していくような形にするよう、我々としては本所のほうに進言をして、そういった体制で臨んでいきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

<金野 信勇委員>

デメリットについては今からわかると思うのですね。その辺を検討してみて、出てきてからではなくて、対応できるような体制を考えなければならないのではないかということです。

<本間 信一委員>

この機構見直しとか行政改革とかはしなければならぬし、前も言ったように、職員の削減については、まだ生ぬるいという話をさせていただきました。しかしながら、率直に言って、人数が減ってくれば当然サービスは低下、現状維持はなかなか厳しい状況があるのかと思いつつも、当然自分でやらなければならない部分もあるでしょうし、協力していかなければならないとは思っています。しかしながら、ここにその大事な見直しなり、協議というか、意見をいただく場をせっかく設定されているのでありますので、もう少し詳しく情報を出していただかないと、議論のしようが無いと思うのです。

サービスが低下しないのであれば、どのようにするのかと必死に聞こうとしているのですが、なかなか回答が出てこない。そういうことであっては、何のために審議なり協議なりしているのかわかりませんので、その辺は出来るだけ情報を出してもらって、色んな協議の場できちんと説明してくれと、念を押すことができますが、これは総論みたいな話であって、何を協議すればよいか具体性が欠けると思うので、その辺の資料を出していただければ、羽黒の審議会でありますので、羽黒地域のことを考えている人ばかりなので、それを具体的に言えるのですが、そのことについてお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

<佐藤会長>

そうですね。よく知らない間が変わってしまったというのでは、「ちょっとなんだや」となってしまうので、情報発信を明確にしてもらったほうがいいのかと思うのですが、どうでしょうか。

<総務課長>

今回は A4 版 1 枚しか資料ございませんし、説明のほうも各庁舎に任されているというようなことでしたが、次回からはご指摘のとおり、詳しい資料の準備とか、あとは当然、行革推進の担当の課長等がおりますので、そういった方々の出席についても検討させていただきたいということでもよろしくをお願いしたいと思います。

<佐藤会長>

その辺もよろしくお願ひします。時間の関係もありますので、そういう要求がありますよといったことだけ理解していただいて、最後に一言二言言いたいていうご意見ございますか。

それでは、この辺でこの議題は打ち切りたいと思いますけれども、いずれにしても行政改革はやらなければいけないような時代だと思ひます。そうしますと、人間というのは変わるといふことをとかく不安に感じるのです。不安を感じたらその不安をいかにしてフォローするかという問題ではないかと思ひますので、行政改革で組織が変わって良かったなど感じられるようにしていただきたいし、変わっていただきたいし、情報発信をしていただきたいと思ひますので、ひとつよろしくお願ひします。

この件についてこの辺でよろしいでしょうか。

(2) 協議テーマ「観光地羽黒の更なるステップアップを目指して」に係る提言書(案)について

資料に基づき説明(観光商工室長、総務課長)

(質疑応答)

<佐藤会長>

はい、ありがとうございます。

提言書といった形でこういった様式で12月中頃には市のほうに提出したいというお話がありました。これは前回もやるつもりでおったのですが、説明云々で時間が取れなかったと、十分な議論というか意見を出す機会が少なかったものですから、今日はまだ時間ありますので、比喩ながら意見を言っていただければいいかなと思ひます。

その前段ですけれども、昨日、農楽里・食楽里・農村散歩という会議がありました。私を感じたのは、羽黒はいいところだなと。文化遺産があり、食材が豊富で、あとロケーションもいい、という形で色々と比較して見ますと、庄内平野をヴェネチアだと。ロケーションはヴェネチアに匹敵するのだと。食材も他には無いものがいっぱいあって、紹介すると皆喜んでくれると。そういった発信力があるのだと、いう話が、高谷先生とか色々おりましたけれども皆さんから出ました。それで、周りがそういった形で羽黒はいい所だ、文化遺産もあるし、ロケーションもいいし、ご飯もうまいと頑張ってくれているわけですが、羽黒に住んでいる我々が、何かのんびりしているのではないかと。そういった形で皆応援してくれているのに、どっぷり浸かっている、「お客さん来るからいい」ということで、心配している割には少しのんびりしすぎているのではないかなと。そういった意味では、今回観光の更なるステップアップを提言するにあたっては、そういったところを加味して、意見を出して、行動に移して羽黒をPRしていきたいなと思ひますので、その辺を踏まえた意見も出していただければいいかなと思ひますので、よろしくお願ひします。

羽黒地域審議会提言書(案)ってありますけど、これはこんな形で出すのか。もっと写

真とか入れて **PR** して、見栄えもいいようにして、「おお、なんだや、これは」という、そんな資料が良いのかと思うのですが。それと、私が言うのはおかしな話なのですが、内容見ますと、具体的な提言という形で提示されておりますけれども、推進すること、検討することという風になっておりますけれども、僕らが出した具体的な案をこれらに加えた方が、提言された側で「ああ、そうか」となる気もするのですが、その辺も含めてどんなものでしょうか。

<総務課長>

一応今回お示しした提言（案）、これが中身の本題でありまして、これに市長宛の添書を付けまして、その上に表紙が付きまして、その表紙自体が写真入か、白黒になるのか、その辺のところはまだ決めておりませんが、これに **2** ページ加わるくらいを想定しています。あと、先ほど会長のほうからも出していただきましたけれども、このような表現でいいのか、皆様方に協議いただいて、適切な表現の方法といいますか、提言書の仕上げ方といいますか、その辺も審議していただければ大変ありがたいと思います。

<天野 俊秀委員>

この審議会で出た意見を纏めたということですので、この提言書をずっと見てみると、私どもの発言が欠けていたのかなという気がするのですが、ほとんどが道路、看板、案内、**PR**、要するに物に対する活動、アクション、または物理的なことを言っているのですね。先ほど会長がチラッと話された、羽黒の自分はどうなのだ、のんびりしすぎてないか、要するに観光で来た人を受け止めるのは建物じゃなく人なのです。受けるイメージは、綺麗だな、大きいな以外は、ほとんど人から受けるイメージで、良かったな、悪かったなとなるわけで、この **2** ページの一番下に「もてなしの気持ち」を醸成となっているのですが、観光ガイドをもっと養成しようとか、地域の人に地域の良さをもっと理解してもらおうというアクションが、その醸成の仕方が何も出てない。その辺の人の動き、受け止める人の作り方なども必要ではないかなと。確かにいいものがあるのは来るのだけれども、**1** 回限りで終わり。でも、何回も来たいというのは、あの場所にあの人が居るからまた行きたい、また話を聞きたいというのがあるのではないかなと思うのですが、そこが少ないなというような印象を私は受けたのですが、皆さんどうでしょうか。

<小南 孝子委員>

昨日の講演会を聞いたのですが、羽黒はすごくいいところがいっぱいあるので、もっと、泊まれるところとか、食べられるところとかが必要だと思います。羽黒山に来て精進料理というと、斎館か宿坊に行く、それで終わりなのです。他にも地元の料理とか伝習料理とか色々ありますが、そういうものを食べさせるというのが本当に少ないのではないかなと思います。例えば、少し具体的に言えば、道の駅みたいな形で、お母さん方の手作りみたいなものを並べて、そこでご馳走するとか、大型バスのお客さんは扱えないかもしれませんが、個人で来る熟年カップルとか家族連れで来るとか、そういった人たちをもてなすというのは、そういった料理も必要ではないかなと思うのです。羽黒山をただ見て、

泊まりは湯の浜に行くか温海に行くかというそんな感じなので、それはそれで庄内地区全体が潤えばいいと思うのですが、今回は羽黒を潤わせる、観光客を誘致するわけですから、如何にお金を落としてもらおうか、そういうことが一番大事なのではないかなと思っています。

<佐藤会長>

昨日の講演会でも、要は着地型観光といいまして、お客さんが庄内空港に降りて次はどこに行くか、それなら玉川寺行くか、それからどこに行くかといったら五重塔だ、で宿坊だと、そこに **1** 泊泊まって次は羽黒山に登って月山に行ってみようと、そういったルートを旅行会社にだけ任せるのではなく、きちんと地元の人が、こういったルートがあるんだと、ここに行けばこんな美味しいものがあるのだというものが、羽黒は出来てないのではないかと。資源は沢山あるのだけれども、ネットワークがきちんと出来ていない。

宿坊にはきちんとお客さんが来ても、下のほうには余りメリットが無いというのではなく、あそこに行って美味しいご飯を食べてみなさいといったようにPRするものが必要ではないか、そういったものもPRして発信していくことが、歴史ある、由緒ある羽黒では大事なことじゃないかと思います。ポスターとか色々ありますけど、それでは今のお客さんは納得しないのではないかと。例えば宿坊に行っても、精進料理は美味しいというだけでなく、その食材は羽黒全体で作っているのだとなれば、もっと喜んでもらえるし、羽黒に来て良かったなと思ってもらえるのではないかと思います。

<本間 信一委員>

今皆さんが言われたような事は、本当に羽黒には豊富にあると、**2、3** 年前に高谷先生でしたか、羽黒の **11** 団地や羽黒山でワークショップをやって、大変いいところだということで、公益大学の生徒たちや先生も認めているんですけども、その後何か続かないということですが、それを発信するには、やっぱりマスコミとか、色んなものを使いながら、イベントを組む事ではないかなと思うのです。羽黒山は昔からやっぱり宿坊や、講中など、色んな形がカチッと出来ているものですから、御田植祭だとか花祭りだとか八朔祭だとかきちんとなっているわけですけども、羽黒の観光はそれで終わりか、といったらそうではないと思うのです。それらの祭りを中心としながら、まだまだ魅力はいっぱいあるわけですので、それをどう発信していくか、イベントを組むか、仕掛けをするかだと思うのです。じゃあそれを誰がやるかということですが、行政なり、そういう学者なりが認め、回答を出しているのに、会長が言うように、実際に羽黒の人は呑気に構えているというのが現状だと思うのです。それをもっともっと発信することによってお客様が来る、そして褒められれば、まだまだ頑張ろうと、そういう気持ちになると思うのですが、結局、羽黒全体は褒められているけれども、やっている人が褒められているわけではないので、そうすると意欲の面で他人事みたいな、そういう感じがするのではないかと。私もそうなのですが、例えば直接人に会って、良かったよ、また来るよと、そういう言葉でますます頑張れるようになると感じています。私が行ったところで印象にあるのは、飯豊の中津川という

集落で、グリーンツーリズムでお邪魔したところなのですけれども、そこにはもう 1 回行きたいなと思っています。農家民宿でしたけれども、当初は 11 戸でやっていたのが、17 戸位に増えて、香港とか、そっちのほうからも誘客するというので、外国語も勉強している、あるいは花笠を勉強しているということで、バイタリティ溢れる気持ちが魅力でもあるものですから、新聞等を見ると、色んなイベントをどんどん発信しているのです。そうすると、ますます行きたいなという気持ちになるので、その辺が羽黒の場合は、羽黒山がやっているからあとはいいのだという感覚なので、来てもらう仕掛けをしていかないと、宝の持ち腐れになってしまう。これからは行動を起こすことだと思うし、誰が担うかという事だと思います。そういったときに行政というのはヒントを与えるのであって、我々がこの審議会が終わっても、せっかく勉強したのですから、どういうことをしていくかというのも視野に入れながら、この意見、提言したものを実現していく、我々がひとつの担い手になるという気持ちを持ってもいいのではないかと感じているところです。

<佐藤会長>

羽黒は出羽三山におんぶしていると思うのです。

<高田 志郎委員>

今、神社の阿部さんが来ていますのでお聞きしたいのですが、昔、別当さんが開山したころは、インターネットも無いし、旅行会社もありません。北は青森、南は東京、千葉の方まで、檀家というのですか、それをどのようにして、大昔に別当さんが拡大していったのか、わかる範囲で聞かせてもらえればありがたいのですが。

<阿部 良一委員>

出羽三山の信仰区域は東三十三カ国、今の関東以北が宿坊さんの檀家になっているわけです。これが夏の間はお山が開きますから出羽三山に来られます。冬の間は、宿坊さんが色んな地域を回って歩いている。そういうことだと思います。それが何百年も続いておりますので、地域のつながりができている。冬場に行けば、その方々が夏来てくださる。そういう仕組みが今でもあるということだと思います。これは、雪が降ることにも起因していると思います。雪が降らなければ、待っていればいいのですが、出稼ぎもそうですが、必然的にそういったものを生活の糧にしていた、良い悪いの話ではなく、それが羽黒地域の特徴ではないかなと思います。それを我々の先輩たちが途絶えることなく続けてきたことが、今につながっているということで、これを再構築するなんてことは無理だと思います。全国を見ても他の地域ではもう無くなっていますので、これが特に神社、信仰に関わる者としては大変な財産であろうと思います。建物はもちろんあるわけですが、そういったものがあるからこそ建物も残っているというのもあると思いますし、決して絶やしてはいけないものだと思います。これが無くなると、山の中に大きな神社が 1 つただぼつんとあるといったことになるという気がします。

<天野 俊秀委員>

先ほど人的養成というお話をしたのですが、具体的なことを今考えていることがあるの

でお話ししたいと思うのですが、接客業の心得というか、基本のようなものを観光行政や、お客さんを担当する人たち全員が講習を受けるような、そういうものがあるのもいいのではないかと思います。何故かという、今、団体で観光会社が作ったツアーに人たちも確かにいっしょにやるわけですが、個人的に家族、グループで来られる方たちが今、何を参考にして旅行先を決めているかという、大体はインターネットの中の地図とか、観光地とかですので、せめてそういったインターネットを駆使できるような研修会や講習会を、観光行政でまとめてできないだろうかと思います。何を学ぶかという、接客業の中に口コミというのがあります、色んなページに出ています。売り出すほうはここが綺麗、ここがいいとか、料理もいいよとか、良いところばかりいうわけですね。その旅館の口コミページを見ると、ここが悪かったとか、正直な客の反応が入ってくるわけですね。それに対する店や宿側の対応で、マイナスをプラスにしてまた客を呼び込むというようなことがあります。また、客を受け入れる**1**つの施設が悪い印象を与えると、観光地全体が悪い印象を受けることになっていくわけです。それを、あそこに行くといろんな人が良い対応してくれる、今料理なんかよりも、サービス、受け答えといったことのほうが、むしろいっぱい書かれているわけです。その受け答えで、行くと気持ちがいいというところは、人が来るわけです。昨日のテレビでも新宿の地下の看板もほとんど掲げてないような店に、入り口を入ったら若い女性客がいっぱい居たと。どうしてこの店を知ったのかと訊くと、ネットサーフィンをしていて、口コミページでここがいいって書いてあったから来た。と言って人がくるわけですし、**1**回来たお客さんを逃がさない為に、フェイスブックとか、ツイッターとか、そういったもので、お客さんをフォロワーにして、今ウチの施設では、ウチの宿ではこういうものが咲きましたとか、こういうイベントやっていますとか、常に発信していく。そういう時代になってきたのではないかなと。パンフレット、チラシを作って、何軒撒けるか、色んなキャンペーンをするとか。それも大事ですけど、何人の人にそれが目に付くかとなると、インターネットの比ではないという気がします。そういう接客の質を高めていくと同時に、**1**回来た人を繋ぎとめていく、何回も来たいと思わせる。あなたが見たのはほんの**1**場面ですよ、もっと色んなところがありますよと、知らせていくことによって、客は更に来たくなるといった講習会など、学ぶ機会をぜひ行政で作っていったらいいのではないかと思います。

<阿部 良一委員>

そろそろこの会議の提言の取り纏の時期になってきたということですが、今日のこの資料**2**種類の両方出て行くのでしょうか。

<総務課長>

市長には、この縦長の提言書（案）を提出します。

<阿部 良一委員>

資料をよく見ますと、この資料の方がいいんじゃないかなと、様々な内容があるように感じられますし、この提言書では平らになってしまっているなという感じがしまして、こ

うちを出したほうがいいのではないかなと。例えばこの中から1つ2つでも、やってみることがあれば具体的な一歩という気がします。さきほど、御縁年の丑年、卯年というお話がありましたが、実はもう1つ羽黒は午でございます。本来はそれぞれ3つの御縁年がありますけれども、正直なところほとんど認知はされていないと思います。丑年というのは21年で、その前の丑年が平成9年ですか。来られる方の割合を見てみますと、信仰で来られる方と観光でこられた方との割合が、前回と今回とでは違っていたんじゃないかと思えます。残念なことに信仰で来るとい方が少なくなっているということになりますけれども、その分観光といいますか宣伝にのって来たという方が増えてきました。昨今、その傾向が強くなってきたのだろーと思えます。簡単な話、どこかの旅行社に行事をぶつけてコース組めば、何千と言う数が来るということです。恐ろしい話、そういった集客の形もあると私は思ったところですが、春先は地震でほとんどツアーが無かったようでしたけれども、これがだんだん復興の兆しの中で、夏くらいから徐々に、お山にいても、お参りが増えてきたなど、同時にツアーのほうもなんとなく来たようだといい感じでした。月山は夏場ですから、それが春から夏にかけて、卯年も含め、月山が動いていたということではなかったかなと。正直なところ、羽黒や湯殿山が増えているわけではないと思いますので、数字の中身が変わってきているような感じがしました。そういった中で組み立てるのは難しいのかもしれませんが、今回のこのテーマについては、ここに出ているものを1つ1つ検証しながら実行していけば、そんなに難しい話ではないと言ったら失礼ですが、できることはあるのではないかと思いますし、決して山だけに来るのではなくて、羽黒の町にも滞留するといいますか、正直なところ素通りする人が多いのだと思えますけれども、その方々がちょっと羽黒の町に寄ろうか、というところでも大きく違ってくるような感じはしますので、この中には良い案が出されているといった感じで拝見しております。

<佐藤会長>

今の話は、具体的な話であがっているのだけれども、こっちの方には載ってないということで、もったいないのではないかなという話だと思います。先ほどの話ではないのですが、点はいっぱいあるのだけれども、それが線で繋がっていないという形ですね。羽黒のルートを開発して、映画村から月山の弥陀ヶ原を1周といった形の、羽黒でしかできないようなルート、そういったものを提言して呼び込むというのも必要ではないかと思うのですが。

<梅津 久美委員>

先ほどからお話を伺っていて、色々と考えてはいたのですがけれども、提言の中に何度も宿坊という言葉が出てきて、小さいながらうちも宿坊ですので、どこまで変わっていけるのかな、変わっていかねばならないのかなと、自分の身に置き換えて考えると、非常に辛いものがあるというか。今宿坊はだいぶ若い方も増えてきていると思うのですがけれども、宿坊の組合として活動されている方は、年配の方も多いです。そういう方たちにといいか、組合の方たちにこういう話を持っていっても、そういう方たちは、観光よりも信仰のほうにこだわりがあると思うのです。観光のお客さんをドンと取れば、確かに収入、

宿泊というのはあると思うのですが、昔からの講のお客さんを大事にというか、自分のペースでというか、冬は冬の活動があると。その活動を止めてまでというか、お札を配ったり、雪囲いをしたりとか、別の仕事があるものですから、それを含めた形で今予約とかあった場合に断らざるを得ない、そういう部分もあって、連続してお客さんが来るわけではないので、ぽっと出たお客さんに対応するのが難しい状況になっているのです。

建物自体も夏仕様で冬にお泊めするような状態には無いわけですし、大きい宿坊さんだと夏の設備も充実して、冬もエアコン等完備とかもあって、そこには色々なお客さんが来られると思うのですが、ウチみたいに小さいところは、冬に1件の予約が入っただけで、毛布から布団からその人たちのためだけに準備しなければならないという状況があって、何時でもどうぞと言える状況にはないのです。夏の間来てくれるお客さんに対応していけばいいという形で、今なっているものですから、寒い冬に状況が整って、お客さんが来てくれる時期があったとしたら、自分のうちではどういった設備を整えなければいけないのかとか、そういうことを思いながら今までの話を聞いていました。

これを進めるにあたって、宿坊の閑散期のこととか、観光客のPRのこととか、いっぱい載っているのですが、それを実現していくためには、ただ提言という形だけではなく、今現存の宿坊の組織、宿坊の組合や、今やっている人たちにもっともっと働きかける。その組織全体で考える時間も必要だと思うし、私たちみたいな次の世代が、これから宿坊をどうして行きたいかということを考えるようなテーブルを用意していかなければ、なかなか。

例えば、新しい食文化を伝えるような道の駅を作って、そこで、ということであればできると思うのですが、現存の宿坊30何軒、20何軒になってしまうのかもしれませんが、その宿坊を活用してということになると、私たちくらいの世代と話をしていかないと難しいところがあるなど、ずっと先ほどからお話を聞いていました。

<佐藤会長>

ありがとうございました。やはり、小さければ小さいなりにできることはあると思うのです。例えば料理だけ召し上がっていただいて、後はどちらかにまわっていただくとか、そういった考え方もできると思うし、先ほど本間さんが言ったように、名所は名所であげていいのだけれども、具体的にやっていく行動隊みたいな形で、転用はするのだけれども誰がやるのだと最終的になってきますので、そういった形で名案あれば羽黒を全体的な形で繋げて、いいところを廻っていくと。当然映画村も冬は閉鎖するわけですがけれども、それに代わって冬はこっちの方を見てもらうとか、そういった発想でいけるような羽黒であればいいと思うわけです。

<金野 信勇委員>

私はこの提言自体は非常に素晴らしいと思います。ただし、提言をした場合にこれを通して予算化してくれるのか。手向宿坊街の景観整備、シャッターを整備する場合の予算化はどうか。それから映画を活用したアクセス道とか、本当に提言が通って、予算化してもらえるとこののであれば、提言すべきだと思います。ただ、これが通ったとしたら観

光課を中心として、これに向かって如何にして実践、実行していくか。そこまで皆やる気あるのかどうか重要です。今こんな状態だからできないではなくて、これが通ったら羽黒支所長を中心として、これに向かってどのようにしてやるのか。それをもう1回再構築する、そういった形で進んでいけるのであれば私は大賛成です。

<佐藤会長>

金野さんは最初から発信力だと、強いアピールをどうやっていくのだと主張されておりますし、次の段階としては、先ほど本間さんが言ったように、どうやって実行していくか、実現していくかということになると。こっちの資料には、今まで検討してきたこと、いいものがいっぱいありまして、こっちの案では平面になっているという感じなので、もっと具体的に入れても良いのではないかという気がします。これが良い、これがある、それでこれを繋げばこういったルートになるという位のPRをして、予算化できたらこれを実行する。ただ、実行するためには、検討する場が弱いかなという気がします。

<金野 信勇委員>

それはやっぱり、1回ではやれないから、何年計画とかが出てくると思うのです。これは5年かけましょうとか、そういう形でやっていかなければ、提言しても絶対実行はできないと思います。

<佐藤会長>

そういった意味では、庄内映画村では、3年先、5年先をきちんと計画しているのです。それに基づいて今から手をうっているのです。やっぱりそれだと思うのです。これを提言して、提言したものを具体的にどういう風に行っていくのだというところも、時間的な計画と併せて載せて、予算がついたらこういう風に実行していくのだというところを、是非とも出してもらいたいという気はします。

<本間 信一委員>

工程表みたいなものが必要だと思うのです。金野さんが言われたように、年次的に実現可能なものからやっていく、それで何年、何年ということになれば、意欲も出てくると思うし、この提言書なり諮問が審議中でありましてけれども、羽黒版でいいと思うのですが広報なりに載せながら広く意見を求めるということも大事だと思うし、工程表なり、その辺の考え方を出しながら、予算の関係ありますので、すぐというわけにはいかないと思うのですが、やっぱり当局のほうから、こういう形でこれを実現するために、今、3年、5年、10年というのは長いと思うのですが、5年ぐらい先までの工程表みたいなものを作成して進めていけば良いかなと思うし、特にハード面については、非常に大きな予算だと思うので、それは年次的な計画等も出していただいて、審議すれば良いかなと思いますので、よろしくお願いします。

<佐藤会長>

今の意見は非常にいいことではないかと思います。実際検討してきたものが色々と難しいもの、予算がつかないもの等あるでしょうけど、こういった形で工程表や取り組む順序

というか、こういう風にやりたいというものを作ったらどうですかね。**12** 月中ごろの提出ということですから、総務課長にお願いしていたのは、今日こういった議論をしまして、参考にして纏めていただいて、次回また審議会で検討したいと思っているのですが、審議会に来てから資料を見ては時間がかかるので、忙しいところ恐縮ですが、**2** 日でも **3** 日でも **1** 週間でも、早めに委員に資料を渡してもらって、集まったときには意見を出し合える様に、していただきたいと思いますので、宜しくお願いします。

(3) その他

特に意見なし。

4 閉 会 (15時45分) 総務課長